

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員、希望者全員の正社員化を。めざせ、均等待遇、なくそう差別！ユニオンは労働法裁判に勝利するぞ！

現代史でも画をなす第48回総選挙。私たちはなにを選択し、なにを失い、なにを手にしたのか？

未来



全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中野支部
機関紙・「みらい」
NO. 3799
17年10月24日(火)
・Fax 095-828-1953

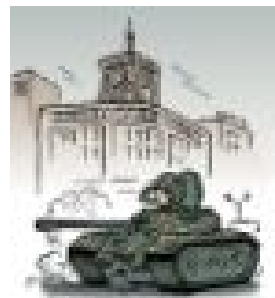
おはようございます。

「日本は神の国である」。これは豊臣秀吉の禁教令(一五八七)の冒頭の文言である。これから四三〇年がたった。爾来、信者は死刑という厳しい弾圧が一八七三(明治六)年のキリシタン禁制の高札撤去(黙認まで二八六年間も続き、現在もその影響が、国民には「怖い」という印象があり、キリスト教の信者は少ない。



我が国は「国難のとき神風が吹く」といわれてきた。(先の戦争では神風は吹かなかったが)。そして今回の第四八回総選挙は、日米の北朝鮮との核戦争の危機で、安倍の「国難突破だ」というアジア・シモン(扇動)とともに、投票日には本物の台風

までやってきた。果たして神風は吹いたのか。結果は改憲派圧勝、野党大敗北の選挙となった。



私たち国民が多数を与えたこの安倍新政権の五年と、これからの三年。安倍はなにを手にし、私たち国民はなにを失ったのか。安倍が手にしたものは、五年の政治的疑惑のみぞぎと、改憲へのパスポートであり、東アジア危機機の戦争発動権である。一方、国民が失おつとしているのは、自らの命の安全と、思想の自由ではないのか。これを検証したい。

日本の政治史で、明治以降の重大な歴史的転機となった選挙を三つ振り返る。

最初は第一回総選挙である。一八八九(明治二二)年の大日本帝国憲法発布の翌年の衆議院議員総選挙で、有権者は十五円以上の納税者(地主階級の富裕層で四十五万人)国民の1%でしかなかった。

ところが国はこの総選挙実施と引きかえに、「集会政社

法」や「治安警察法」をつくり、政党の禁止と集会に届出義務を課した。結社禁止である。集会の禁止や解散命令権を警察権力が手にすることで、おりの護憲派、自由民権運動を弾圧した。

だがこのときは野党の立憲自由党が第一党となる。(いまの護憲派とは異なる)。そして歴史は動き、日本は日英同盟を結び、日清、日露戦争へとなだれ込む。国民の九九%が排除された明治の選挙と戦争の時代だ。

二つ目の選挙が一九二八(昭和三年)二月に行われた第十六回総選挙である。これに先立ち日本は普通選挙法(男子のみ)ができた。大正デモクラシーの護憲派運動のおかげだが、このときも国は、その背後にさらに恐ろしい毒まんじゅうを用意していた。この普通法成立からわずか五日後、社会主義者の取り締まりを口実に国は治安維持法を強行する。



この選挙では無産政党らの五つの野党が選挙協力を結び

八人が当選する。全体の得票数は五十万票で、得票の比率でも全体の5%でしかなかった。圧倒的少数派だ。

がしかし、共産党や無産政党の伸びに脅威を感じた国はこの選挙の直後に、全国の共産党や社会主義者の一五六八人を検挙し、弾圧した。三・一五事件である。この流れで日本の左派、共産主義者や社会主義者たちの組織は壊滅し、以降十五年間の中国との戦争や、アメリカなどとの太平洋戦争へ入っていく。



この治安維持法では、天皇制と私有財産を否定する社会主義政党を国禁の党として弾圧した。これはさらに拡大され、最後は自由主義思想者までもに及んだ。このため国民の間には国民相互の総監視体制で、反共意識が根深く浸透し、「ア力は怖い」という意識とともに、宗教的にはキリスト教を畏怖することと同じく政治的には社会主義政党も怖いとの風土が育ち、これも日本には根付かない状態だとされる。これが戦前の日本の歴史である。

そして戦後である。国民は



絶対天皇制と戦争から解放され、自由を手にする。敗戦からわずか八か月後の一九四六(昭和二十一年)四月に女性も参政権を得ての第二回総選挙(戦後第一回)が行われた。当選者は保守党が二三四人、社会党九二人、共産党五人などであった。これからみると、国民の政治意識も選挙結果もあまり変わっていない。

そしてその次の総選挙で社会党が第一党になるが、おりの東西冷戦や朝鮮戦争でレッドパージが始まる。GHQや政府の弾圧政策で、労働運動や社会主義政党の多くの活動家、指導者が職場から追放される。全労連の解散命令や機関誌「赤旗」の発刊停止など、共産党や左派系の政党や労組の諸団体はつぶされていく。

今日は裏面に続きます。

期間雇用パート労働者の皆さん! 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1 集-山本, 2 集-向井, 3 集-山田, 郵便-高田, ゆうちょ銀-上筋, 他支部・分会の役員へ。

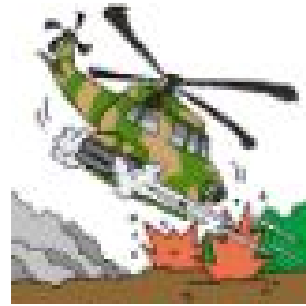
これが日本における転機となった三つの総選挙と、国民を取り締まった弾圧法の流れである。その基本に、自由主義体制下における社会主義者弾圧の歴史が並行している。

本来、自由主義国家体制とは国民一人一人の思想信条の自由だと思つが、日本ではそうではない。日本の自由思想は日本国憲法一四条、二八条の基本的人権などに依拠するし、私有財産では同一九条で「財産権は、これを侵してはならない」と規定し、民法にもある。しかしこれに対して、「日本は神の国」とする思想がいまもあり、こつした人権と権利思想を否定的なものとする。



明治の大日本帝国憲法は天皇を主権者として、国権の大権を与え、「神」とした。そして戦後の平和憲法は国民を主権者として、多くの基本的権利を認めるが、この源流は一七八九年フランス革命の人権宣言であり、また民法は一八〇四年のフランスのナポレオン民法典である。

これが日本へは明治維新時にまるごと導入された。日本の自由民権思想の経典はフランスにあるのだが、当時の日本には国民の権利などという言葉も思想もなかった。



出島表門橋開通まであとひと月である。出島の周囲に海水が入る側溝をつくり、ライトアップし、出島を海の沖島として百五十年ぶりに復元させる。確かに歴史的価値はあるが、この出島は「鎖国」という国民の思想統制を目的とした徳川幕藩体制の弾圧のための負の遺産であり、キリシタン弾圧の抑圧の歴史的証人でもある。

その出島の一番東端(上流)に立つ木造の建物は日本最古のプロテスタント派の神学校である。今からちょうど五百年前の一五二七年一〇月二二日にドイツで始まったマルチン・ルターの宗教改革のとき、彼らはプロテスタントと呼ばれた。その意味は「異議の申し立て者」であり、「なんでも反対」の人といわれた。いまの国会で野党がそう揶揄されているが、国や政治や意識言葉は五百年たっても同じ」であり、反対派攻撃の変わらぬ実態である。

国家における信教の自由、政治結社の自由、思想・信条の自由、保守派と反対・改革派。これらがすべて問われたこの国会と、今回の総選挙であったが、また国会改革のすぐろくは振り出しに戻った。

民進党が希望の党にすり寄り、希望の党の小池が左派排除をして、民進が三分裂し、結果、野党が少数分立し、敗北した。野党共闘は日本には共産党嫌いがある限り成立しないのか、とも思う。これは野党にも思想信条の自由がないというべきか。それとも希望の党自体が野党・反自民ではあるが改革派ではなかったのかである。今回の自公の勝利の功績は小池さんにある。



そして野党共闘を主導していた共産党も敗北し、日本政党史で最初に登場し、第一党となった「立憲」自由党と同じような名前の「立憲」民主

党が、今回は野党第一党となつた。政治は護憲だけではないが、戦争(いのち)と経済(くらし)を両立ちできる政治構造を私たち自身が手にするまで、なんでも頑張りななくてはならない。あきらめこそ最悪の選択肢であるからだ。

選挙翌日なので、総括は難しいが、フエイクニュースと選挙は表裏一体だ。聞けば今、日本は戦後最高の好景気持続期間だという。株価も九〇年代のバブル期のころと同じく高騰しているともいう。株ももたない貧乏人だから好景気感は皆無だが、本当なのか、この数字は。



選挙が始まる直前から新聞では政府発表というところで、これらの記事が目立った。日銀や日本年金機構などの公的資金が株式に参入し、数兆円規模で買を続け、株価が高止まりしたというが、これはフエイク株高ではないのか。

国、権力によるマスコミ操作や経済の偽装工作の典型だが、これくらいに騙され、「自



民以外に選択肢がない」とい理由で、安倍の五年間を承認し、新たな次の三年で、改憲とあらたな戦争の時代へ突入する日本でいいはずがない。次にくる改憲、働き方改革などの攻撃に備えよう。野党は束になるしか勝てないことが、今回の最大の、そして唯一の教訓である。

足尾銅山の鉍毒事件を生涯問い続け、最後は死を賭して明治天皇に直訴した政治家・田中正造は「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と日記に書いている。鉍毒事件で苦しむ農民を見捨てる国の政治に異議を申し立てた至言だ。

政治家の信条の一番は先憂後楽だ。中国の教えだが、徳の高い君主は、民に先駆けて国公のことを心配し、自らは民に遅れて楽しむという意味だ。一年に数十回もゴルフをする安倍首相は、先楽後楽の政治家だ。民の心に無関心。これが首相を信用できない元

真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず
村を破らず、人を殺さざるべし(田中正造)

であり、許されないと。もう一度、森友学園、加計学園の不正をしつかり究明し、政治に信頼を取り戻す。これが私たちの役目だ。